
ふぁいなるクエスト！

高嶋ナカノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふぁいなるクエスト！

【Nコード】

N3456Y

【作者名】

高嶋ナカノ

【あらすじ】

ある朝、ミナミンの枕元にいきなり現れた、女神アルテシア。彼女曰く、ミナミンこそが魔王パイチャンを倒す勇者だというのである！！しかし勇者ミナミンはぐうたら無職、ニートでダメ人間、ヤル気とはまるつきし無縁の世界の男なのであった！！女神アルテシアは勇者ミナミンのケツを叩いて魔王パイチャンを倒し、無事に世界の平和を取り戻せるのか的、ゆるゆる展開のダメダメギャグファンタジー！！

（※1 この話はほぼ全編、ほとんどが台詞文章です。ブログやチャットログ感覚で書かれていますので、横

書き読みを推奨します。顔文字などもありますので、苦手な方は回避をお願いいたします）（※2 たまに挿絵があります。挿絵表示をONにしておいていただけると嬉しいです）

1話「夜明け前の勇者。」

>i34931—4402<

女神「起きなさい……勇者ミナミンよ……」

勇者「ンガゝスピヨピヨ……ムニヤムニヤ……もう食べられない……」

女神「お約束チックな寝言を言っていないで、目を覚めますので……」

勇者「こらあ。逃げちゃダメだろう。ヨーコも、ユキコも、マリリンもみんな俺のものだあ。満腹だけどやっぱりみんな食べちゃうーグエツヘツヘツ……」

女神「Σ（ロ、111） 食べるって女の方ツ？しかもお腹いっぱいとかいってるし！！連載開始早々ど淫夢ツ？ええい、起きなさいというにー！！！！」

女神アルテシアは勇者ミナミンが寝ているベッドをひっくり返した！ドギヤバキめしよドンガラガッシャーン！！！！

（ノー”ー”ノ　⌞　。∴

勇者ミナミンは床に頭をぶつけて、10のダメージを受けた！

勇者「、(#。D。)ノ ゴルア!!! 誰じゃい、俺様のことを派手に暗殺しようとするフトドキ者わー!!!」

女神「派手に暗殺って言葉として変でしょ! それから私は暗殺目的でやってきたわけではありません!」

勇者「じゃあ強盗? お金なんかないよ。だって俺様無職だモンツ★
(キラッ)」

女神「(。D。) ?」 強盗ではありません! それから威張れることじゃないでしょっ。」

勇者「i i — l i (Φ D Φ ;) i i — l i ってことは、よ……夜這い? 俺様もしかして貞操の危機真っ只中ツ?」

女神「、(#。D。)ノ もっと違いますッ!!! 私の名はアルテシア。私は貴方に勇者として、世界を平和に導くために、私と共に魔王と戦ってほしいのです!!!」

勇者「なあんだ。宗教の勧誘だったのか。すいませ〜ん。俺様の宗教は巨人なんでえ、新聞は読売とることに決定してるんで結構ですう。」

女神「宗教でもないし、新聞の勧誘でもないし、ましてや強盗でも夜這いでもありませんッ!!!」

勇者「ぐ~~~~~~~~。+。*。」

女神「Σ (。D。) ;) いやだから寝ないでくださいってばッ!!!」

勇者「（ガバツと起き上がって）つかね！！非常識！！夜這いでも強盗でも宗教勧誘でも巨人ファンでもない分際で、こんな夜中に勝手にひとんちあがりこんで、勇者になれとか魔王を倒せとか、とってもすっごく非常識！！そんなわけで、俺様寝るから！！おやすみグツナイ！！ばたんきゅう。」

女神「非常識なのは謝ります！けれど時間がないのです。魔王ピイチャン悪の手は、すぐそこまで……って全然聞いてないし……。だめだわ……。完全に爆睡してる……。明日の朝、出直してこよう……。めそめそ。」

こうして勇者ミナミンは、女神アルテシアの誘いを、初回から見事にナイガシロにしたのであった。

がんばれ、女神アルテシア！！
負けるな、女神アルテシア！！

世界の未来は、勇者ミナミンではなく、君の手にかかっている！！

続く。

2話「勇者、目覚める。」

勇者ミナミンは自分の部屋の温かいベッドの中で、うつすらと目を開き、窓の外の空を見あげた。
レースのカーテンごしから差し込む光は明るく、空は晴れ渡っている。

勇者「おお、なんていい天気なんだ。こんな日はゆっくり昼寝でもするに限るな！ってなわけで、おやすみなさ〜い。ぐ〜。」

ドンガラガツシャンぷげぽによめっしゅん。
、(#。D。ノ「」(ノ、D、)ノ

女神「あなたッ！！どっつっただけ寝る気なんですかッ！」

勇者「誰じゃい、俺様の安眠を邪魔する奴わ！！」

女神「ゝ(＊、D、＊)ノ”彡☆ もう完全に昼なんですよ！おまけにこれから昼寝だなんて！！いつまで待たせる気なの！！！！」

勇者「俺様、朝寝して・夜寝するまで昼寝して・時々起きて居眠りをする算段！！」

女神「いっそ永眠してしまいなさい！！」

勇者「イエッス★アイアイサー!ぐぐ。」

ばきメシヤごきぐきポギョーン!!

εε|| || || || ≡ゝ、(#、∩)っ「L」(ウラアアア)(ゝ、
□)(ゝ)

勇者「(「、口;)」 なにしやがる!!!!暴力反対!!!!」

女神「(メ≧皿≦) || 3 いいから起きなさいというのに!!」

勇者「永眠しろだとか起きろだとか、どっちだよ!!つつーか、ア
ンタ誰?」

女神「だから!!女神アルテシアですッ!!昨晚も名乗ったでしょ
っ!」

勇者「お前、何でそんないかにもファンタジーですゝみたいなズル
ズル長い衣装着てんの?髪もやたら長いし。歩くの邪魔じゃね?」

女神「だから私は女神なんですってば!天界の住民だから、服も人
間界のデザインとは違うものなんです!ほら、私の背中に翼がある
でしょ!(くるりと後ろを向く)」

勇者「あ・ホントだ。でも、そんなちっこい翼ついてても、意味ね
えじゃん。」

女神「空を飛んだりする時には、大きく広げることが出来るのです
よ。」

勇者「収納可能なんだ。へえ、便利だな。……で？その女神様が、人間界・忒本国・北魁道県・薩幌市在住の20歳無職、好きなものの巨人、集めてるものエロ本という俺様に、一体何の用事だ？」

女神「それも昨日から言ってるでしょっ！魔界の王ピイチャンが世界を闇に沈めようと企んでいるとの予言が出たのです。ですから勇者ミナミン、貴方の力を借りに来たんですよ！」

勇者「（ピ・ポ・パ）あゝもしもし。警察つかう？俺様、ごく普通の平凡な無職の一般市民なんすけど。なんか頭のおかしい痴女が、俺様の芳しき汚部屋（※長年開けてなかった押入れのすみっこみたいな臭いが充満）に押し掛けてきてんすよね！」

女神アルテシアは勇者ミナミンの携帯電話をひったくる。

女神「（笑顔で）あ・警察の方ですか？すみませう。今の間違い電話です。頭がおかしい変態は今の男性のほうなので、どうぞお気になさらず。ピッ。（切）」

勇者「（「、口、」）誰が頭がおかしい変態じゃっ！！」

女神「（メ≧皿≦）||3 そっちこそ、誰が頭のおかしい痴女ですかッ……！」

勇者「（、ε、）朝っぱらからやってきて、初対面のパンピーを勇者よばわりする女は変態でえっす！！（断言）」

女神「い、い、い、(T▽T)い、い、い、ううう……こんなアホに、変態呼ばわりされるだなんて…。」

勇者「つつーかね！魔王倒せとか無理！俺様、自慢じゃないが、金も根性も実力もないざんす！（どーんと胸をはる）」

女神「本当に自慢にならないわね…。けれど、勇者ミナミン、あなたしか魔王を倒すことはできないのです。」

勇者「(||A||;) 何故にッ？」

女神「あなたの家は代々勇者の家系でしょう。」

勇者「あゝなんかそゝらしゝねゝ。うちの母ちゃんが言ってたわ、うちのハゲオヤジは昔、聖剣エクスカリバーを使える勇者だったとか何とか。」

女神「ええ、この家には代々『聖剣エクスカリバー』が伝わっているはずです。そして、ミナミン、あなたは勇者家直系、唯一の男子。聖剣エクスカリバーは直系男子が20歳になると、自動的にその人物に継承され、他の人物は例え先代の勇者であろうとも、一切その聖なる力を発揮することが出来なくなってしまうのです。そして、聖剣エクスカリバーでなければ、闇の魔王を倒すことはできません。」

勇者「うゝゝ。何か仏間にある床の間に、やたらゴツくて派手な剣が偉そうに飾ってるあるなゝって、前から不思議に思ってたはいたけれどもさゝ。アレ、そんなメンドクサイもんだったのかよゝ。」

女神「とりあえず私は『聖剣エクスカリバー』に用事があるのだけ

れど…。」

勇者「Σ（「Δ」；）　にゃんですとう？」

女神「エクスカリバーは今、どこにあるのかしら？（部屋の中をキョロキョロ）」

勇者「（…；；▽；…；…）　えゝ…その件についてですがアゝ…諸事情とかがありましてゝもう、この家にはないのでございまするゝ。（遠い目）」

女神「Σ（——。Δ。　ええっ？諸事情って何ですかっ？どういうことっ？きちんと説明してくださいっ！」

2話目にして、伝説の聖剣をさっさと紛失したらしい勇者ミナミン。魔王ピイチャン打倒の道を阻む、急転直下の大事件がいきなり勃発ッ？

聖剣エクスカリバーの行方はいかにッ？

続くっ。

3話「聖剣エクスカリバーの行方。」

女神「Σ（――。Δ。） 聖剣エクスカリバーがここにはないって、一体どういうことですか？あの聖剣は、あなたの家でもあるナカノ家に代々伝わっている家宝のはずですよっ！」

勇者「。＋。・・ヾ（＊・ω・）シ・・。＋。 いやまあ、そーなんですけどお。色々あってエ、ついどこか行っちゃったってゆうかあゝ。」

女神「女子高生口調で言い訳してないで、ちゃんと答えてくださいっ！聖剣はどうなったのっ？」

勇者「（遠い目をしながら回想開始）そう……あれは卑怯な畏だったのだ……。」

女神「畏にハメられて、聖剣を奪われてしまったってことですかっ？」

勇者「ハイ。その通りにございます。（何故かとても殊勝な態度）」

女神「何としても聖剣を取り戻さなければ、世界は魔王ピイチヤンの手に落ちてしまう……！一体、どんな敵に奪われたのですかっ？」

勇者「えー……あれはかれこれ1週間ほど前のこと……。近所に住んでる友達の、ハラと、ハルユキと、ゴンちゃんの3人で、雀荘に入りましたですな……。」

女神「……………今、皆まで言わずともオチ見えたんですが

…。まさか賭け麻雀で負けて、スカンピンになり、借金代わりに聖剣エクスカリバーを渡したりとかしてないでしょうね。…」

勇者「ゝ(＊、ヅ＊)ノ”多☆ 違うんだ！あれは俺様、ハメられたんだ！！ゴンちゃんときたら、超大技・国士無双を出しやがったんですよ！！ありえん！！あれは詐欺だ！！間違いねえ！！確信をもって断言するッ！！！」

女神「、(#。ヅ。)ノ」ガッ？(ノ、ヅ)ノ」

勇者「・。・(Pヅ、q。)・。・ 痛いッ！暴力反対！！！」

女神「(ゝヅ) ハメられたかどーかは知ったこっちゃありませんよ！つまり、聖剣エクスカリバーはゴンちゃんという方のおうちにあるのねッ？」

勇者「ういうゝい。」

女神「一刻も早く取り戻さないと！もし聖剣が魔王の手に渡ってしまったら、世界が終わってしまうわ！行きますよ、勇者ミナミン！ゴンちゃんのうちへ！！！」

勇者「えゝ。(不満げ) 朝ごはん食べてからでいゝいゝ？あと、俺様、うんこしたいゝ。」

女神「えゝゝじゃありません！！つか、朝ごはんも何も、もう昼ですッ！うんこしたら、今すぐ行きますよッ！」

勇者「へいへい。」

勇者を卑劣な罠（笑）に嵌め、聖剣を奪ったのは、ゴンちゃんという男らしい！

女神アルテシアと、勇者ミナミンは、無事聖剣を取り戻すことが出来るのだろうか？

続く。

4話「親切ゴンちゃん。」

ゴンちゃん宅に到着し、家の前に佇む二人。

女神アルテシアは、おんぼろ木造建築2階建ての家屋を見上げた。

女神「ここですね…ゴンちゃんのおうちは。ここに聖剣エクスカリバーがあるのですねっ?」

勇者「た…たぶん…。(自信なさげ)」

女神「(「ㄥ」?) たぶんじゃありませんッ! 聖剣を取り戻さないで、魔王ピイチャンを倒せないですよっ!」

勇者「賭け麻雀で負けたカタに聖剣取られちゃったからなァ…。ゴンちゃん、タダで返してくれっかなあ…。俺様、只今、一銭も持っていないぜよ。」

女神「とにかくゴンちゃんに会ってみましょう。こゝんにちわっ!」

パタンとドアが開く。

ゴン「誰じゃい、こんな朝っぱらから玄関先でデカイ声を出すのわ
!!」 W (△;) W 「

女神「すいません…もう午後なんですけど…。しかも髪の毛にバ

ゴン「いやいや、ちゃんとうちにはあるぜ。まあ、確かにあれは俺が麻雀で勝って賞品代わりにもらったもんだけどさ。けど元は友達のもんだし、いつか返して欲しいなんて話になるかと思って、手元に置いておいたんだ。つーか、俺が持っても使い道ねえし。」

女神「・。・。(ノ、＼)・。・。あ……ありがとうございますうう……!!!(感涙) さっき類友とか罵って申し訳ありませんでしたっ！勇者ミナミン、あなたはいいお友達をお持ちなのねっ!!」

勇者「(ㄥ ?) ゲンキな女だな、オイ。」

ゴン「それがなあ……礼を言うのは、まだ早いと思うぜ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れよ。」

勇者ミナミンの友達の割には、ゴンちゃんは案外マトモな人(ちょっとお寝坊さんなのが玉に傷★)だったようだ。

聖剣エクスカリバーも、どうやら無事だったらしい。

だが、ゴンちゃんの煮え切らない様子からして、どうやら聖剣に何か異変がっ？

どうした、聖剣!!

どうなる、世界!!

まだまだ勇者ミナミンと、女神アルテシアの旅は始まったばかりだ!!

続く。

5話「恐怖の漬物ババア。」

ゴン「とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れてよ。」

勇者「（――） うーい。おっじゃましまーっす。」

女神「聖剣エクスカリバーはちゃんとあるのかしら…？（どきどき）」

ゴン「おーい。ばあちゃーん！」

ゴンちゃんが奥の台所に向かって叫ぶと、腰の曲がったしわくちやの老婆がよたよたと出てくる。

勇者「（O、▽）／ ういーす。ばーちゃん、お久しぶりー！まだ死んでなかったのか！」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ。」

女神「（＊、ω、＊） まあ、お元気でいらっしやいますこと。」

老婆「おんやまあ、よく見たら、おめえさん、饅頭屋のミナミンくんでねがー。んまア立派になっ…てないのう。ちっとも。」

勇者「（ハ、Δ、？） 社交辞令ぐらいサービスで言わんかい、ク

ソババア。」

老婆「隣の子は嫁さんかい。あらまア別嬪さんだところ。なんじやいなんじやい、うまいことやりおって〜！イヒヒヒヒ。」

女神「（＊、ω、）　いいえッ、決してッ！！断じて嫁などではございません。おばあさまッ！！」

老婆「んだども、ちょっとケツが小さいんでねが？　もっとう、おなこのケツはボーンとしてねえと、元気な赤ちゃんは産めねえど！」

女神「Σ（〃、∩、〃）　ケ：ケツ？　いえだから、私は嫁などでは……」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ★」

女神「……………」

ゴン「すまん、ねえちゃん。うちのばあちゃん、耳が遠いんだ。ちよっぴり認知症も入ってるし。」

老婆「、（＃、∩、）っ　誰が耳が遠くて、認知症が入ってるってッ？　あたしゃまだ、たったの92歳だよ！！！！」

勇者「うゝん、相変わらず都合よくタチの悪いババアだ。こういうババアに限って長生きだけはするからな。」

女神「ババ……いえ、おばあさまの件はおいておくとして、ゴン様、

聖剣エクスカリバーはどこにあるのでしょうか？」

ゴン「……いや、えーとな…台所にあることにはあるんだけど…。」

ゴンちゃんは申し訳なさそうな顔をしながら、台所の隅を指差した。そこには、大きな瓶が置いてある。

勇者「何だ？この大瓶？」

老婆「ああ、それはアタシが漬けているヌカミソ漬けの瓶さ。ヌカミソってのは、大変でなア。毎日こうして掻き混ぜなきゃならんのだよ。」

ババアは瓶の蓋を開けると、隣に置いてあった聖剣エクスカリバーでヌカミソをぐっちゃぐちゃとかき混ぜ……

勇者「Σ（ロ、lll）　　って！！ババア——！！！！ちよつと待ったアアアア！！！！！」

老婆「なんじゃい、いきなり大声出して。（どぷっ。ぐりぐりぐり。孫のゴンが持って帰ってきたこの棒、ヌカミソ混ぜるのに丁度良い長さで幅でう。おー今日も芳しい良い香りがするぞえ。」

女神「い、い、（T▽T）い、い、　あああああああ。」

ゴン「（へーへ；）　　ばあちゃん。悪いんだけどそれ、ヌカミソ混

ぜ器じゃねんだとよ。元々ミナミンの持ち物で、返してやりたいんだ。ばあちゃんにはまた、俺がちょうどいい長さのヘラを買ってやるよ。100均で。」

老婆「ありゃまあ、そうだったのかい。どおりでちよつと重たいと思っておったんじゃ。ほれ、持ってけ、ミナミンちゃん。」

勇者「（「、口、」）「 臭ッ！！超ヌカミソ臭ッッッッッ！！」

聖剣エクスカリバーは無事だった……が、別の意味ちつとも無事ではなかった！

勇者御一行様はヌカミソ臭くなった聖剣エクスカリバーで、果たして魔王を倒すことが出来るのであろうかッ？

魔王もいい迷惑だ！！

続く。

6話「新たな聖剣！（ビニール袋入り）」

勇者ミナミンと女神アルテシアは、聖剣エクスカリバーにこびりついたヌカミソを落とすため、ゴンちゃん宅の風呂場を借りることにした。

女神「（ごしごしごしごし）うううう……ヌカミソは落ちたけど、匂いが消えない……いいいい！！！」

勇者「（くんくんくん）うっわーホントだ……くっさ……いい！！いや……ん！！！」

女神「Ⅲ（。Ⅱ。Ⅲ） 乙女の真似しながら、他人事のように言わないでくださいよ！！もとはといえば、あなたが麻雀で負けて聖剣をゴンちゃんに獲られてしまったから、こんなことになってしまったんですよ！」

勇者「（；w；） ううう……そうだった……。反省。しょぼん。」

女神「Σ（´・ω・lll） えっ？いきなり素直な態度？ いえ、一応ヌカミソの匂いが染み付いてしまった以外は聖剣は無事だったんですし、そんなに落ち込むことは……」

勇者「チキショウ、あそこで俺様があの牌を捨てずにいれば、ゴンちゃんに勝っていたものを！！悔やんでも悔やみきれぬ！！きつと次こそは勝あつ！！（決意）」

女神「（—Δ—；） ……反省って、麻雀に負けたことに対する反

省の方ですか……。ていうか、全く反省してませんね、ミナミン…。」

勇者「で・さゝあ。これからどーすんの？ まさかその聖剣持ち歩けとか言わないよネ？」

女神「（、∨、＃） 持ち歩かないで、どうやって魔王ピイチャンを倒す気なんですかつ！」

勇者「いやだってその聖剣、持ち歩いたが最後、別の意味でこの街の勇者になっちまうぞ！！」

女神「、、、（T∨T）、、、、 そうなんですよねえ。問題はそこなんです。こんなヌカミソ聖剣では、魔王に辿り着く前に、世間の笑いものになってしまいうわ…。」

勇者「Σ（；、∩・、） そうだっ！！俺様、いいこと思いついた！！（勇者ミナミンの頭上に、豆電球がピコーンと灯る）」

女神「。＋。（・∨・）。＋。 えっ？何かいい案でもっ？」

勇者「今日からこの聖剣の名前は、エクスカリバーではなく、『聖剣ヌカミソード』と呼ぼう！！！！」

女神「Ⅲ（。∩。Ⅲ） 名前が状況にピッタリ適確になってしまったというだけで、問題は何一つ解決してないじゃないですか——！！！！」

勇者「..+.（∩*。▽。）∩。☆ よく伝説の剣って斬ったら炎が出るとか、凍りつくとか、連動して魔力効果あったりする

べ？ 斬ったらヌカミソ臭がこびりつく聖剣、今、ここに誕生！
むしろ積極的にもっとたくさんヌカミソを塗ったくつとくべき！！
（何かとっても素晴らしいことを考えついた的、誇らしげな表情）

女神「（「、口、；」）」 どんだけ無駄な方向にポジティブなんですか！ 斬った敵がヌカミソ臭に悶える前に、常時持ち歩いている私たちの方が、臭気にあてられて悶絶死してしまいますよ！」

風呂場のドアがパタッと開いて、ゴンちゃんが顔を出す。

ゴン「おう、どうだ？ヌカミソは落ちたか？」

女神「・・（P、q）・・ 臭いが全然落ちないんですううゝ！こんな凄まじい臭いが染み付いた聖剣持ち歩いて、魔王ピイチャンのところになんて行けないゝいい！！うわゝん！！」

ゴン「そうじゃないかと思ってよ。ほれ。」

勇者「（。・、） あ、透明なビニール袋だ。」

ゴン「d（ゝω・＊） これに入れて歩けば、とりあえず匂いは防げるだろ。」

勇者「おう、サンキュー！助かるわ！」

女神「・・（P、q）・・ 聖剣をビニール袋に入れたまま、魔王を倒しに行く勇者なんて聞いたことないゝゝ！！カッコ悪すぎますうううゝ！！ うわぁん！！」

勇者「ゴチャゴチャ五月蠅い女だなく。もうヌカミソードになっちゃったもんは仕方ないだろうが！」

女神「。。。。(ノ、口、)。。。 ああああああ、もう名前がすっかりヌカミソードで定着しちゃっているうううう!!」

勇者「じゃあな、ゴンちゃん。色々世話になったな。そろそろ俺様たち、魔王退治に出かけるわ。」

ゴン「おう。ま、ほどほどに頑張れよう！」

こうして新たな名前となった聖剣ヌカミソード（ビニール袋入り）を携え、女神アルテシアと勇者ミナミンの伝説の旅が、よ・う・や・く始まったのだった！

果たして勇者ミナミンと女神アルテシアは魔王ピイチャンを倒せるのだろうか？

っていうか、そもそもこんな調子で、魔王ピイチャンのところまで辿り着けるのだろうか？

ぐうたらニートだった勇者ミナミン、そもそも魔王のところに行く気があるのかどうかすら怪しいぞ！

頑張れ、女神アルテシア！

君の苦労はまだまだ始まったばかりだ!!

続く。

7話「パチンコ屋と魔王の因果関係についての考察。」

女神「さて。無事……じゃありませんけど、どうにか聖剣エクスカリバーも取り戻したことだし、魔王を倒すためには、我々の他にも仲間が必要ですよね。」

勇者「げっ、うっそ！マジで魔王討伐に行くの？俺様もっ？」

女神「（「ん」？） 7話まできてるのに、この話の存在意義ですらある超基本初期設定にツッコミ入れないでもらえます…？」

勇者「えゝいやゝん。行きたくなぁいいいいゝ。俺様、おうちでネトゲしなきゃなんないしい。」

女神「ある意味、魔王討伐は人生と世界を賭けた大ゲームじゃないですか。」

勇者「チツチツチツ。わかってないなゝ。ゲームっていうのは、自分が傷つかないからこそやって楽しいわけよ。大きな代償を伴う戦いは楽しめないし、だったらやる意味すらないの！おわかり？」

女神「ゲームに関してのあなたの意見はよく判りましたが、魔王討伐をやる意味がないという点に関しては賛同しかねます。別にあなたの意見は聞いてませんからっ。」

勇者「（メ≧皿≦） 3 ギャー！！強制イベント発動とは、横暴ナリ——！！——」

女神「……で。魔王を倒すために協力してくれるような、ちゃんと

した仲間を探さなければならぬわけですが。(スルー)」

勇者「い、い、い、(T▽T)い、い、い、うううう……さすがは強制イベントだ……。俺様の意思に関係なく、ずんどこ話が進んでゆく……。」

女神「まずミナミンが聖剣を持つ剣士でしょ。私は白魔法を使えま
すから、後は黒魔導士や召喚士など、攻撃系魔法使いと、武闘家・
騎士あたりに分類されるような体力のある方が欲しいですね。」

勇者「うむ。スロットの達人や、パチスロファイター、冬ソナ機コ
ンプリーターなども欲しいところだな。(神妙な顔つきで検討に参
加)」

女神「遊び人(ひと括り)は不要ですッ!てか、パチンコ屋に魔王
はいません!……!」

勇者「Σ(。△。;)ば……馬鹿なッ!!魔王ともあろう者が、
パチンコ屋に通っておらぬとわ!!童貞を死守するよりも愚かで恥
ずべき行為じゃないか!!」

女神「魔王ともあろう者がパチンコ屋通い必須って……ミナミン、
あなた、どうでもいいところで魔王の存在を買いかぶってませんか
……。ああ、もう、あなたと話をしていると、どんどん本筋から逸れ
ていってしまうわ。とにかく仲間よ仲間!ミナミンの知り合いに、
パチンコ通いをしていない、真面目な黒魔導士や騎士はいないの?」

勇者「う(。A。う)」黒魔導士や騎士だとかいう以前に、こ
の俺様の知り合いで真面目なヤツなぞ一人もおらぬわ!!ましてや、
パチンコ通いしてない愚か者になぞ、知り合う機会があるはずがな
い!!ふはははは!!」

女神「(T皿T) 何故、そこで威張れるのが、さっぱり理解できません…。」

勇者「おお、そうだ！(手をぽん)パチンコ屋以外で、黒魔導士や騎士をナンパできそうな場所には心当たりがあるぞ！」

女神「(・。・。；) えっ、本当にっ？どこですか、そこはっ！」

勇者「ズバリ、そこは『酒場』でっす！！世界の悪を倒すため仲間を求める志の高い連中が集う定番の場所、それは酒場！！もう、酒場に行くっきゃない！！」

女神「(＊'▽'＊)ノ。+。＊。 まあ、人間界にはそんな便利でポジティブな集いの場があるのね？素晴らしいわ！早速そこに行きましょう！」

勇者「、(<▽>)ノ ちょうどいい具合に、陽も暮れてきたし、腹も減ったことだしな！よっしゃ、酒場ヘレッツゴー！！」

かくて、勇者ミナミンと女神アルテシアは、仲間を求めて町の酒場へ行くことにしたのだった。

だが普通、酒場ににいるのは黒魔導士や騎士ではなく、ただの酔っ払いだ！！

しかもどう考えても、勇者ミナミンは飲み代を持っていないぞ！！騙されるな、女神アルテシア！！

毎回ピンチ続きまくりだ、どうなる勇者御一行様ツ！？

続く。

8話「仲間探し(の、はず) i n 酒場。」

勇者「さあ着いたぞ！この酒場の名前は、『つぼ九』というのだ！」

女神「では、このお店の中に魔王ピイちゃんを一緒に倒してくれそうな、魔法使いや剣士の方がいらっしゃるのですね！」

勇者「。+・（・▽・）。+・。おーいるいる、絶対いる！太鼓判を大盤振る舞いものっそいウジャウジャたむろってること、もう間違いなし！」

女神「（＊、ω、＊）まあ。下界にはなんて頼もしい場所があるのかしら。ここで仲間を集めれば、魔王ピイちゃんを倒しに行くことができますね。さっそく中へ入りましょう！」

>i34948—4402<

店員「ラッシャッヤッセー！3名様ですかア？」

勇者「……ん？3名？俺様とアルテシアしかないな……」

ミナミンが後ろを振り返ると、背後には……

勇者「ΣΣ「（———、□———；；）」 ギャヒイイイ！！
！ミイラが俺様の背中にくっついてるうううう！！！」

女神「（。Д。；；；。Д。） キャー！！………って、ちよっ

と待ってください、勇者ミナミン！ミイラではありません。見た目はミイラに果てしなく近いですが、その方はきちんと生きていらっしやるみたいですよ。」

ミイラ「ふっひょっひょっひょっ！ミイラとは失礼な連中じゃな！」

女神「おじいさん、連れのミナミンが、失礼なことを言ってしまったて、申し訳ありません。」

勇者「（――） いや……お前だつてさっき、『見た目はミイラに果てしなく近い』とか、凄い失礼なこと言つてたぞ……」

女神「（コホンと咳払い）で、おじいさん、どうなさつたのですか？私達に何か御用でしょうか。」

実は生きてたミイラじじい「お主ら、さきほど、魔王ピイチャンを倒すとか何とかゆーとらんかったかの？」

女神「ええ。私達は魔王ピイチャンを倒すべく、仲間を探している最中なのです。」

突然、ミイラじじいの両目から大粒の涙が、鼻からは鼻水が溢れ出した。

勇者「ギャッ。汚ねッ！（ぐぐ）」

ミイラじじい「（おうおうと泣く）やっと……やっと、魔王を倒すという若者に出会えた！苦節30年、ここで待っていた甲斐があった

というものじゃ!!やはり志の高い若者は酒場に集うという、人間の話は本当だったのじゃな!」

勇者「アホか!!志の高い若者が居酒屋なんかにいるかつ!酒場に
いるのは普通、ただの酔っ払いばかりだ!!」

女神「Σ(￣ロ、lll) ……えっ?」

勇者「えゝごほんごほん。で、アルテシアちゃん。魔王30年放置
プレイでも、世の中平和なんだから、別にあと300年ぐらいほつ
たらかしといても、世界は平和なままなんじゃないのかね?」

女神「(溜息)それがねえ……神界も最初はそう思っていて、魔王
ピイチャンが誕生したのは知っていたけれど、実害あるわけじゃな
しってんで対策はうたなかったんですよね。それが最近になってか
ら、魔王ピイチャンったら急にヤル気を出してきたみたいで、神界
に対して挑戦状とか、テロ予告とか、卑猥な写メ画像とかを、ばん
ばん送りつけてくるようになったんです。それでお父様がすっかり
お怒りになっちゃって。まあ、魔王を倒さなければならぬという
根拠はそれだけではないんですが……。」

勇者「魔王ピイチャンに何があったんだ!つか、卑猥な写メ画像を
頼んでもいないのに先方から送ってくれるだなんて、むしろいい奴
のすることじゃないか!喜んでもらっとけよ!俺様にも送っていた
だきたいわい!!」

女神「(＊、ω、) 神界はセクハラにうるさいんです。卑猥
画像は全面禁止なのですっ!!」

勇者「Σ(一一)。D。」 エロ画像全て禁止だ……と……?ありえん

！！許すまじ、神界！！俺様に滅ぼしたいのは、むしろ神界のほうだ！！」

女神「い、い、い、(T▽T)い、い、い、話が途中から全部、卑猥な写メのことになってるんですけど……。」

ミイラじじい「アルテシア……それに神界ですとっ？では、あなた様はもしか、大神ゼース様のお子様18人の中の末娘、アルテシア様では……？」

女神「はい、その通りですが、私のことをご存知なのですか？」

勇者「(一”一;) ……ちょっと待てい。お前、今、18人兄弟だと言わなかったか？」

女神「ええ、そうですけど。私には兄が7人、姉が10人おられますが、それが何か？」

勇者「(「、口、」;)」 何か？じゃねえよ！エロ画像を全て禁止しておきながら、その子沢山っぷり！お前の親父、どれだけ夜に励んだんだよ！汚ねえぞ、権力者！！もう許せん！（どっかーん！…背景で火山が噴火）俺様、魔王討伐はもうヤメる！！今、この瞬間から魔王側に加担する所存！！」

ミイラじじい「アルテシア様は噂に違わずお美しいですのう。お姉さま方もきつと皆、お美しいのでしょうか。」

勇者「Σ(;;、∩・、) え？今、お姉さまとか言ったっ？そうかつ！すいません、嘘ですっ。俺様、さくつと魔王پیイチャンを討伐いたします！そして熟女のお姉さま方10人に、よってたかつ

て誉めていただきます。ぐふふふふ。（めくるめく夢の妄想タイムへ突入）」

女神「 $\neg$ 、 $\neg$ 、 $(T \vee T)$ $\neg$ 、 $\neg$ 、 どうしてこんな、信念はないのに邪念はたっぷりの男が、世界を救う勇者なんでしょう……？」

ミイラじじい「おお、女神様と勇者様でしたか。素晴らしい………
…実は折り入ってお願いしたいことがあるのですじゃ！」

どうやら勇者ミナミンはムッチリ熟女がお好ましい。
アルテシア（清楚スレンダー系）はミナミンのストライクゾーンからはまるっきり圏外のようなのである。

ところで、ミイラじじいの「お願い」とは一体何なのだろう？

続
く
つ
。

9話「ミイラじじいをお願い。」

とりあえず店員の案内で、酒場の一番奥の個室に通された3人であった。

ミイラじじい「早速ですが、勇者様、ワシの願いというのは……」

勇者「♪(o, ∇,)／ (ピンポン★↑呼び鈴)注文お願いしまあす！えっとね、俺様、まず生ビールね。あと、たちポンと、ネギトロと、鮭のハラス焼きと、鶏のからあげとおく……」

女神「(ω, ;) すいません……おじいさん。この人、胃袋が満たされないと脳が働かないんです……」

ミイラじじい「おっと失礼、これはワシが無粋でしたな。ここで出会えたのも、何かのご縁。ここのお代はワシが全てもちますゆえ、お二人とも遠慮せず飲み食いしてくださいませ。」

勇者「(目をキラキラさせて、ジジイの手をガシッと掴む)有難う、おじいさまっ！！刺身盛り合わせもお願いしていいっ？」

女神「ミナミン！さっきから肉や魚ばかりではないですか。野菜も頼みましょう。すいませくん、この大根サラダお願いしまあす。」

じきに、それぞれの飲み物が運ばれてくる。

勇者「じゃ、とりあえず、俺様の今後の健闘を祈って、カンパ―イ★」

女神「自分で自分の健闘を祈るっていう名目で、自分で乾杯の音頭をとる人を始めて見ました。」

勇者「（ビールを口に含みながら）……で？ じいさん、俺様たちに頼みって何よ？ 仲間にしてくれとか言うんなら、願い下げだぞ。魔王を討伐する勇者様のパーティには、ボインの女の子しか入れない決まりになっておるのだ。」

女神「Σ（Д」；）　ちょっと！ いつから、そんな決まりが出来たんですかつ！」

ミイラじじい「ふひよひよひよ。いやいや、この老体で長旅はもう無理ですじゃ。願いというのは全く別のもの。」

勇者「それを聞いて安心したぜ。」

ミイラじじい「そういえば、まだ自己紹介もしておりませなんだな。実はワシ、魔王ピイチャンの守役を務めております、魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミというものでして。」

勇者ミナミン、飲んでたビールをブーツと噴射。

ミナミンの正面に座っていた悪魔伯爵ライーミ……めんどくさいな……いいや、ミイラじじいで……ミイラじじいはビールまみれとなった。

女神「（…；。；Д，。；。：）
 魔界の四大
 悪魔伯爵ううう？？？」

勇者「ΣΣ」「（―――、□、―――；；）」L　おいしいiiiiiiii！
！めっちゃ敵じゃん―――！！乾杯してる場合じゃねえつつの！
！俺様達、まだばりばりレベル1なのに、いきなり最強四天王の一人
みたいなの出てきちゃってんよ、しかも近所の居酒屋で！！四天王
は四天王らしく、ラストダンジョンの通路の真ん中（一本道な
で、回避不能）とかで、踏ん張ってるべき！！……ハッ……ちよつ
と待て、もしかしてこのビール、毒ッ？」

女神「（。D^o；≡；D^o） ええええっ？私、大根サラダ、もうつまんじやいました——！！！」

ミイラじじい「ふひよひよひよ。ご安心くだされ。年老いたとはいえ、このライーミ、四大悪魔伯爵の誇りがございまする。毒殺などという、姑息な真似はいたしませぬゆえ。」

女神「（＊、ω、＊）ほっ。そうですか。良かった。」

勇者「アル 何で敵を信用してホッとしてんだ！つか、四大悪魔伯爵様が、レベル1の俺様たちに何のご用なわけっ？断っておくけど、俺様たち金も実力も、アルに至っては胸もないんだぞっ！！」

女神「Ⅲ（Ⅰ。Ⅲ） 私の名前はアル、テ・シ・アです！ 気安く
ショートカットしないでッ！ それから、私の胸のことは放っておい
てくださいッ！！」

ミイラじじい「金も実力もおっぱいもいりませぬ。実はワシの頼みとは、勇者様と女神様に書いていただきたいものがあるのですじゃ。

┐

ついに判明！！アルテシアは実は貧乳だった！！（本筋にどうでもよさげな事項を重要視して、一番最初にもってくる）

それはともかく、いきなり登場した魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミ！！

彼が女神アルテシアと勇者ミナミンに書いて欲しいものとは一体ッ？次回、とっても急展開の予感！？

続く。

10話「神界v魔界の伝説！」

ミイラじじいはおもむろに白い紙と筆を懷から取り出し、アルテシアとミナミンの前に置いた。

ミイラじじい「女神アルテシア様と勇者ミナミン様に、ずばり！ワシが書いてもらいたいのは、我が主、魔王ピイチャンに対する、『挑戦状』ですぢゃ！！」

女神「魔王宛の挑戦状というと、『今からお前を倒しに行くぞ』とか、『巨悪許すまじ！』とか、そんな感じの文書のことでしょうか？」

ミイラじじい「はい。その通りでございますじゃ。」

勇者「w(△;)w 挑戦状？ なして、そげな面倒臭いものを！！」

ミイラじじい「その理由を話す前に確認しておきたいのですが、お二人は500年前に起こった、魔界と神界の大戦争のことを詳しくご存知ですか？」

勇者「(????) いんや。すっげえ、全く、これっぽっちも知りゃしねー。」

女神「……ミナミン……。これ、人間界では誰もが小学校で習うような、有名な伝説のはずなんですけど！」

勇者「この俺様を見くびらないでもらおう!!!俺様が小学校の授業で起きていたことなど、あるわけがないっ!!!（どーん）」

女神「見得をはらないでください。小学校だけじゃなく、中学校でも高校でも、起きてたことなんかないくせに。」

勇者「Σ(;;・、∩・´) いきなり鋭いツツコミをかましてきやがったな!!!フツ……成長したな、アル!!!胸以外のところが!!!」

女神「Ⅲ(。∩。Ⅲ) 胸のことはほっといてって、さっきから言ってるでしょうッ?」

ミイラじじい「(回想モード)……そう……今を遡ること、500年前……。先代の魔王アストロゼブ様率いる魔界軍、ゼース王率いる神界軍が、世界の命運を賭けて激突したのじゃった……!」

勇者「…＊…・(∨´)……。…＊…・ あっちゃん。ミイラじじい、勝手にノリノリで話し出しやがったよ。しかもこれ、何かこの物語の背景(今更)に関わる的な話っポイしい。うっわゝ絶対、話長くなりそーだゝ。めんどウザゝい。(おもむろにピンポン★) すっいませゝん、焼酎と、フライドポテトと、軟骨のから揚げと、豚串追加でお願いしまゝす!」

女神「ミナミンったら、また肉ばかり頼んで。あ、私、このイチゴクレープというものが食べてみたいですゝ!」

ミイラじじい「それはそれは激しい戦いじゃった!!!勿論、その戦いには、ワシも参加しておったぞい!!!両雄は一步も引かず、魔王と大神の力がぶつかり合った影響で、海はうねり、空は荒れ狂い、

火山は次々と炎を噴き上げたのぢゃ!! 戦いは100日もの間続き…… (以下、ミイラじじいの大活躍物語が始まるが、長いので割愛)

勇者「Σ(口 111) げ。アル、お前、もう甘いもののいくの？ 目の前が甘くなって気色悪くなるから、頼んじゃ、めっ。」

女神「(TεT) え〜いいじゃないですか〜! けち〜!

ミイラじじい「……その時、ワシは咄嗟に敵の刃を交わし、我が究極の魔術をおみまいしてやつ…… (相変わらずミイラじじいの大活躍物語が続いているが、誰も聞きたくなさげなので省略)」

勇者「甘いのが欲しいなら、せめてホラ、このメニューに載ってる、梅酒サワーアイスってヤツにしろよ。こっちの方がアツサリしてそーだ。」

女神「まあ、梅酒サワーの上に、アイスクリームを乗せたオススメの一品ですって。美味しそう。これにしようかな〜♪」

ミイラじじい「こうして、イチゴクレープと、梅酒サワーアイスの戦いは佳境を迎え、梅酒サワーアイスの勝利に終わった……って、あれ？」

勇者「お・話終わった? あ、じいさんが話している間に、じいさんの分のつくねの追加、頼んどいたぜ。」

ミイラじじい「おお、これはかたじけない。……って、お前ら!! ワシの話を聞け————!!! (がっしゃ〜ん!!)」

女神「で、まあ、おじいさんの話を要約すると、神界と魔界の大戦争が500年前にあって、必然的に二つの世界の中間に位置していた人間界が戦場になっちゃったんです。迷惑した人間は、神界側に加担することになりました。で、神界と協力して、必殺兵器・聖剣エクスカリバーを作り、人間代表の勇者は聖剣を使って魔王を倒しましたとさ。めでたしめでたしっ。」

ミイラじじい「(NOT)ノ…・…・…ト…・…・…
ワシの熱弁を、あっさりまとめるな———!!」

勇者「チッ。結局、どうして俺様達が魔王に挑戦状をしたためなきゃならんのか、全然判明しないまま、次回へ持ち越しじゃないか！
！1話分、無駄にしゃがって！」

ミイラじじい「Ⅲ(。Ⅳ。Ⅲ) それはお前らのせいじゃあああ
—————!!」

そんなこんなで、だらりんちよの3人。
酔っ払いながら、世界の命運に関わるような、真面目な話をする方が間違っているのだっ!!

続くっ。

11話「ぐうたら魔王。」

女神「……で。おじいさん、どうして魔王さんに私たちが挑戦状を書く必要があるんでしょう？」

ミイラじじい「そのお話をする前に、我が魔界の王ピイチャンのお人柄と申しますか、悪魔柄についてご説明せねばなりません。」

勇者「、(@▽@)ノ 悪魔柄ってどんな柄？ しましま柄？ ぐるぐる柄？ アハハハハ、天井がぐるぐるしてる。」

女神「(―”―;) ミナミン、貴方、タダ酒だと思って飲みすぎです！」

ミイラじじい「先代の魔王であるアストロゼブ様は、持病の糖尿病が悪化してすっかり体調を崩されてな。今から30年ほど前に、先代の魔王は一人息子であらせられたピイチャンに、王位を譲ったのでございます。」

女神「まあ、糖尿病！ それは大変ですわね。私の父である神界の王者ースも高血圧とメタボで、先日お医者様に食べ過ぎ飲みすぎを注意されました。」

ミイラじじい「それはそれは。神王も魔王も、寄る年波には勝てませぬのう。」

勇者「ゞ(＊、∩＊)ノ”シ☆ 糖尿病の魔王とか、メタボで高血圧の神王とか、聞いたことねえっ！ の！ なんて生活習慣病丸出しなんだよ！ せめて韓ドラっぽく、体裁のいい白血病あたりをチョ

イスせんかい！つか、先代の魔王って、伝説の勇者に聖剣で斬り殺されたんじゃないのっ？何で糖尿病になるような齡まで、長生きしていらっしゃるわけっ？」

ミイラじじい「はあ。先代の魔王様は、斬られはしたものの、命には別状のない所を斬られましたのでな。」

女神「（＊、ω、＊） まあ、それはご無事で良かったですねえ。」

勇者「（「――」） 元魔王の無事を女神が喜んでどうする。アル、お前、自分が魔王を倒しに行く側の立場だっつーの、忘れてるだろう…。」

ミイラじじい「で、ですな。話は戻りますが、このピイチャンがまた、子供の頃からヤル気のない方でしてのう…。何も悪いことをしようとしないのですじゃ。毎日部屋にひき籠っては、人間界のゲームをしたり、漫画を読んだり、だらだらしているばかり。」

勇者「ニートだな！間違いない！それはニートだな！（キラーン）」

女神「あなたのお友達ですね、ミナミン。（冷たい目でミナミンを睨む）」

勇者「（「、口、；」） ヲタニートと俺様と一緒にするな！俺は麻雀をしたり、パチンコをしたり、外出して金を稼いでいる！『アウトドア嗜好のプータロー★』だ！」

女神「いずれにせよ、全うな社会人として成り立っておらず、親に生活全般を頼っている点では、ピイチャンと同類ですっ。だいたい貴方のそのポジティブな思考の根拠はどこにあるんですかつ。」

ミイラじじい「で、見るに見かねたワシが、どうにか魔王ピイチャン様のケツを叩いて、神界に挑戦状やテロ予告などを出させて、実行させていたというわけですなのですが……」

勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。他にも、先ほど言いましたが、エロい画像を写メで送りつけてきたりとか。」

ミイラじじい「そのエロ画像にしても、ふんどし一丁でドヤ顔をしているピイチャン様自身のセクシーショットとか、ペットのスライムの交尾シーンとか、犬の肛門のどアップだとか、しわくちゃババアの入浴シーンの隠し撮りとかばかりなのです！」

勇者「どれもこれも、手近で無料ゲットできるエロレベルの低いものばかりではないか……！」

>i35185—4402<

ミイラじじい「こんなことでは、立派な悪とは言えませぬ……！……！……！
くうっ！（思わず溢れてきてしまった涙をぬぐう）」

勇者「（じじいと一緒に涙目になりながら）くうっ！いらぬ……！そんなエロ画像はいらぬううう……！ちゅーか、それエロ画像じゃないよ……！中2男子画像だよ……！しかもメカドック……！今更メカドック……！……！……！誰も知らんぞ、『よ○しくメカドック』な

んて古い番組!!」

女神「(両手をぱんっと合わせて)判りました!つまり、やる氣の出ない魔王ピイちゃんさんに、我々が挑戦状を出すことによって、ピイちゃんの闘志に火をつけ、魔王として正しいヤル氣を出してもらおうということですね!」

ミイラじじい「イエッス、その通りでございますちゃ——!!」
(万歳)」

女神「そういうことでしたら、お任せください!私、子供の頃から作文は得意ですの!これも人助け。困っている子羊を救うのは、女神としての勤めです。」

勇者「アル……お前、ひと良すぎ…。」

女神「(※、ω、※) まあ、そんな。誉めていただくことのことではございません。女神として当然のことですもの。」

勇者「いんや、これっぽっちも誉めちゃいねえけどな。(呆) 挑戦状を書いて、ピイちゃんがやる氣を出すと困るのは、俺様達の方だと思うんだが…。まあ、アルがそれでいいなら、俺様的にはどうでもいいけど。」

ミイラじじい「では、書いていただけるのですなっ!」

女神「勿論です!(どーん)」

こうして女神アルテシアと、勇者ミナミンは、魔王ピイチャンに挑戦状をしたためることになった。

二人は一体、魔王にどんな挑戦文を叩きつけるのであろうか？

続くっ。

11話「ぐうたら魔王。」（後書き）

【どうでもいい注釈】

「よろし〇メカドック」

大昔、某海賊マークの週間少年誌に掲載されていた漫画。全12巻。大雑把な内容としては、自分で整備した車が、頑張って走っている。以上。（大雑把すぎ）

12話 「勇者と女神の挑戦状！」

魔王のヤル気を引き出すため、挑戦状を書くことになった勇者ミナミンと、女神アルテシア。

居酒屋の一室で、カリカリと一生懸命、何かを紙にしたためる二人。

勇者「（□）」 よっしゃアアアア！！！！でえきたアアアア！！！！」

女神「 $\begin{smallmatrix} \circ & + \\ + & \end{smallmatrix}$ $\begin{pmatrix} \cdot & \Delta & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot \end{pmatrix}$ $\begin{smallmatrix} \circ & + \\ + & \end{smallmatrix}$ $\circ$ 私も出来ましたっ★」

ミイラじじい「おお、有難うございます！どれどれ、まずは女神様のほうから、見せていただいてもよろしいですか？」

勇者「お、俺様にも見せろ見せろ！」

女神「(＊、ω＊) ええ、どうぞ。」

[illegible]

【女神アルテシアの挑戦状】

魔王ピイチャン様

こんにちは、突然のお手紙、失礼いたします。

私は女神アルテシアという者です。

このたび、故あって勇者ミナミンと一緒に、魔王ピイチャンさんに

じきにそちらにお伺いすると思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

[illegible]

女神「（＊＾
―　　＾＊）
はい、何でしょう？」

ミイラじじい「それ以前に、女神様が魔王ピイちゃん様に会いにくことは判りますが、何をしにくるつもりなのかがさっぱり判りませんなあ。」

勇者「不快にさせねえでどうすんのよ！　そもそも俺様たちは、魔王を倒しに行くんだぞ！　あのなあ、挑戦状っていうのは、もっとこう、相手の神経を逆撫でするようなもんじゃないとダメなの！！　見ろ、俺様の読んだ相手がムカつきMAXになることウケアイの、華麗なるお手紙を！！」

ミイラじじい「では、勇者様のお手紙も拝見させていただきますぞ。」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

【勇者ミナミンの挑戦状】

コンニチワ。ボク、ドラ○もん。
コボちゃんの妹は、コボパパの子ではない。
マスオの子だ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

女神「Σ Ⅲ（。Ⅲ；Ⅲ）何ですか、これ———！！！！」

ミイラじじい「Σ（ロ、lll）そうだったの———！！？間
男マスオ、恐るべしぢゃあああ———！！！！」

勇者「フフフ。どうだ。実によくムカつく手紙だろう！！（得意げ）」

女神「何を威張ってるんですかっ！確かにムカつきはしますが、ムカつく以外、挑戦状として何ひとつ目的を達していないじゃないですか！何故、ド○えもんが、コボちゃん宅にいらぬ疑惑の火種を撒き散らさなければならいんですかッ！そもそも『ボク、ドラえ○ん。』とか名乗っている時点で、魔王さんに貴方からの手紙だということ判らないでしょっ！」

ミイラじじい「何ですとう？コボママの浮気は捏造だったのでござ
いまするかつ？謝れ——！！」○売新聞とコボちゃんに謝れ——
「——！！！」

勇者「チッ。芸術を理解しない連中は、これだから困る…。」

女神「アレのどこが何が芸術だというんですかつ。」

ミイラじじい「いやもう、時間が勿体ないですから、挑戦状の文面
はワシが考えますぢや。お二方には、ワシの書いた文章に同意の署
名だけお願いいたしますッ！」

勇者&女神「〜△〜（〜△）〜 はあ〜い。」

二人の挑戦状は、ミイラじじいの手によって、あえなくボツとなっ
てしまった。

ミイラじじい書いてもいいんなら、最初っからそーしてくれれば
いいのに〜。

続く。

勇者「あいよ。ボク、ドラえも……（ガッ。↑アルに殴られた音）……判ったっちゅーの！……ったく冗談の通じねーぶつぶつ。あいよっと。超絶勇者★ミナミン様見参！っ」と。

女神「超絶勇者★ミナミンって……。何かバトルスーツとかに一瞬で変身できそうなネーミングですねえ。」

ミイラじじい「これでよし！早速魔王ピイちゃん様に、コレを届けてまいります！……と、その前に。」

ミイラじじいは、おもむろにスクツと立ち上がった。ついでに、何か凛々しい顔つきになっている。

よぼよぼジジイにカッコいいオーラ出されても、かえってムカつく。

ミイラじじい「実はこの魔界の四大悪魔伯爵こと、このライーミ、女神様と勇者様にお見せしている今現在の姿は、人間界用の仮の姿でしてな。真の姿をお二方に見せておかねば、礼儀を欠いてしまいます。」

勇者「Σ（⌒；） ナヌツ？もしかして俺様さしおいて、ジジイの変身予告っ？超絶悪魔★ミイラじじい誕生伝説をぶちあげる気かッ？（嫉妬）」

女神「（人、▽、）・☆。…＊。まあ、本当はどんなお姿なのですか？わくわく。」

ミイラじじい「真の姿をお見せするその前に。ワシ、ちょっとおしっこに行ってきますじゃ。」

勇者「は？待たせてんじゃねえよ、先に变身してからにしろよ！」

ミイラじじい「*…☆…+…（∩*。▽。）∩…☆+…
…* ギャアアア！も…もれるウウウウ★」

勇者「判った判った！！大でも小でもいいから、とっとと行ってこいっ！」

ミイラじじい、そそくさと居酒屋の個室から出てゆく。

———数分後。

居酒屋個室のフスマがスパーンと勢い良く開いた！！

と、そこには！！

いかにも悪魔貴族っぽい、豪華ズルズル極彩色キラキラ衣装を着て、ドヤ顔をしたミイラじじいが立っているではないか！！！！

ミイラじじい「これぞ、ライーミ真の姿でござりまするツツツ！！！！
（どどーん！！！！）」

女神「…*…（//▽//）…*… まあ、ご立派なお姿に！！」

勇者「（メノ、皿）ノ…」ちよつと待たなか——
——！！！！どどーんじゃねえつつの！！アルも感動してんじゃねえよ！！着替えてきたよねッ？今、明らかにトイレで着替えてきたよねッ？つか、コスプレしてきただけで、中身はミイラじじいのままだよねッ？何ひとつ変身っぽいもの、してないよねッ？」

ミイラじじい「そんなことはないぞよ、勇者様。ほれ、これを見なされ！」

ミイラじじいは勇者たちに向かって、くるりと背を向けた。

じじいのお尻のあたりに、いかにも悪魔っぽい、黒く細長いしっぽがプランプランと揺れている。

ミイラじじい「ご覧ください！このしっぽこそが、悪魔の証なのでござりまする！」

勇者「ど——————でもいーわ！！そんな証！！おい、アル。このしっぽ斬っていか？ちょうど俺様、聖剣ヌカミソード（ビニール袋入り）も持ってるしっ。」

女神「（「、口、」）」ヌカミソードじゃありませんったら！！その剣の名前はエクスカリバーですっ！」

ミイラじじい「ぬう？こちらが礼を尽くして謙虚に接待しておるというのに、勇者のこの態度は何たることじゃ！このライーミ、怒りましたぞ！」

怒り心頭のミイラじじいは、ズルズル衣装の懷から水晶玉を取り出すと、パカーンと床に叩き付けた！

粉々に碎け散る水晶玉！

勇者「ぎゃわっ！破片が飛んできたっ、危ねっ！……ん？水晶玉の破片から、どよんとした黒い空気みたいなのが出てきて、広がっていったぞ…？」

女神「Σ（ロ、lll） ま……まさか、今の水晶玉は…！！」

勇者「え？何？何？ガラス爆弾攻撃とかじゃなかったのっ？」

女神「今の水晶玉はおそらく『魔界の悪魔・詰め合わせセット玉（黒）』ですっ！叩き割ると、その周辺地域に大量の低級悪魔が出てきてしまうのですっ！」

ミイラじじい「女神様はお察しが早い！その通りぢゃー！ふっひよっひよっひよっひよっ！！！！！！」

ついに真の姿となり、悪魔の本性を剥き出しにしてきた、魔界の四大悪魔伯爵ライーミ！！

ミイラじじいは、人間界を悪魔でいっぱいにしてしまうつもりらしい！！

どうやら本当に世界のピンチに突入っぽいぞ！！

どうする勇者ミナミン&女神アルテシア！！

世界が破滅したら、明らかにあんたたちの責任だッ！！

続く。

14話「勇者、生まれてはじめて凛々しく戦うッ！」

さっきまで仲良く酒を飲んでいたはずだったが、突然何かのスイッチが入ったらしく、勇者ミナミンと女神アルテシアに魔物の牙を剥いた、魔界の四大悪魔伯爵ライーミことミイラじじい！！

じじいの放った『魔界の悪魔・詰め合わせセット玉（黒）』のせいで、人間界に魔界の悪魔が溢れてしまうことになってしまった！

ミイラじじい「（メ≧皿≦） 勇者め、酒をおごってやった恩も忘れて、よくもワシの悪魔のしっぽを聖剣で斬りおとそうとしよったな！！」

勇者「ゞ（＊、ㇿ＊）ノ”彡☆ やかましいわい！！プラプラしやがって、目障りなんじゃ、そのしっぽ！！」

女神「ちよつとちよつとミナミン！！（女神、勇者を部屋の隅に引きずっていき、耳うちする。）」

勇者「何じゃい！！アル！邪魔すんな！！」

女神「ミナミン、あの悪魔のしっぽは、本当に魔族にとっての誇りなんですってば！神族における天使の羽ぐらいの価値があるものなんですよっ！」

勇者「Σ（―□―；）！！ えゝ？そーゆーモンなの？つまり悪魔のしっぽって、男におけるタマタマ様ぐらいの価値があるってこと？」

女神「（、×、；） 私は女だから、タマタマ様の価値は判りませんっ。ミナミン、下ネタ多すぎっ。」

勇者「いいか、タマタマというものはだな、タマタマというものはだなアゝ!!」

女神「うるさい、酔っ払ってるでしょ!で、話を元に戻しますけど、しっぽは斬りおとされてしまうと、その悪魔は魔力を失ってしまいます。勿論、魔力の源であるしっぽは、そう簡単に斬りおとすことはできません。」

勇者「タマタマだって切り落とすと生殖能力が……」

女神「（無視）そこで作られたのが、聖剣エクスカリバーです。エクスカリバーは悪魔のしっぽを斬りおとすために必要な、聖なる力を持った魔法剣なのです。500年前に起こった神界と魔界の大戦争の時も、当時の魔王アストロゼブ王のしっぽを、あなたのご先祖である勇者が、聖剣エクスカリバーを使って斬りおとしました。それで魔王アストロゼブは力を失い、神界と人間界が勝利するこ

とが出来たのです。」

勇者「ああ、なるほど。先代魔王が聖剣で斬られたのに、どうして糖尿病患うまで長生きしてんのか不思議に思ってたんだけど、しっぽを斬り落とすところまでで止めてたってわけね。」

女神「そういうこと。今、突然ミイラじいさんが怒り出したのも、あなたが聖剣で彼のしっぽを斬りおとしてやるなどと、言い出したからなのですよ!ミイラじいさんに失礼じゃないですか。きちんと謝りなさい!!」

勇者「（へ、△、＃）　フツ。やなこった!!」

女神「えっ？」

勇者はスクツと立ち上がると、ミイラじじいの方に向き直り、カッ
コ良くビシイッ人差し指をつきつける！

勇者「だいたいなあ！勇者と女神が、敵である悪魔と仲良く酒飲んでる状況からしておかしいんだっつーの！このミイラじじいさえ倒しとけば、世の中平和になるってことだろうが！魔王ピイチャンは無能でヤル気がないんだから、放置プレイにしておいても別に構わんということだ!!」

女神「ああ、そうか、言われてみればそうですね。（手をぼん）」

ミイラじじい「ぬぬう!!　バレてしまったか!!　流石は勇者と女神!!　（油汗ダラダラ）」

勇者「相手はヨボヨボのミイラじじい一人、しかも弱点が判りきっていて、最強の武器も我が手にあるッ！確実に勝てる状況の戦いであれば、俺様は最高に強いぜッ!!　（瞳がキラリーンと光る）」

女神「w（△；）w　いやまあ、誰でも普通はそうでしょうね。威張りながら宣言することではないと思いますが…。というか、そこまで恵まれた状況じゃないと戦わないんですね、ミナミン……。」

勇者「ふはははは!!　くられ、ミイラじじい!!　正義の怒りをな

「アアアア！！」

早速勇者は手に持っていた、聖剣エクスカリバーを透明なビニールから取り出したのであった！！！！

あのダメ勇者ミナミンが初のヤル気まんまん、マトモにカッコよさげ！？

むしろ何だかやな予感！！

続く。

・。。・*。。。。。。*・ムツフォワアアアア~~~~
 〽ン。*。。。。。。*。。*
 。。☆。。+。。☆+。。*
 。。☆。。+。。☆+。。*
 ☆。。+。。☆+。。*
 。。(n-▽-)η。。*。。。。。。*。。*
 。。+。。☆+。。

ミイラじじい「ぐはあああああッ！何じゃ、このヌカミソが超発酵した挙句に、ほどよく腐ったような匂いわッ！！（鼻押さえながら、悶絶して転げまわる）」

女神「ヌカミソが超発酵した挙句に、ほどよく腐った『ような』匂いじゃなくて、そのものの匂いですうううう！！！！（鼻を押さえながら、同上）」

勇者「想像以上にキタ——☆。。*。。。（。▽。）。。*。。。。☆——！！ 強烈強烈強烈うううッッッ！！！！俺様、イケナイ封印を解いてしまったアアアア！！！！（鼻を押さえながら、以下同文）」

ミイラじじい「おのれ、勇者&女神！魔界の襲撃に備え、聖剣エクスカリバーを強化しておったのじゃな！！！！」

勇者「ハッハッハッハ、その通りだ！！おそれいったかつ！！（大威張り）」

女神「『勇者&女神』だなんて、お笑い芸人のユニット名みたいな括り方しないでくださいッ！ミナミンも嘘つかないのっ！」

勇者「とかツツコミ入れてる場合じゃねえっつの！マジ死ぬ！！このままでは俺様が死ぬううう！！しかもこの居酒屋個室って、バツチリ密室じゃねえか！換気換気ッ！」

勇者ミナミンは、必死で手を伸ばし、居酒屋個室のフスマを開けようとした、その時である！

ミナミンが手をかける寸前に、フスマが勝手にスパーンと開いた！

つぼ九の店員「お巡りさん、この部屋ですっ！言い争う声がしたのは……ううっ！」

警官「ぐはっ！何だ、この異臭わッ！！まさか、テロっ？」

女神「い、い、い、(T▽T)い、い、い、はわわわわ。ち……違うんですうううう！！！」

店員「ああっ！見てください、お巡りさん！刃物持ってる人がいますよー！間違いないません、こいつらテロリストですっ！」

勇者「、(#。D)ノ 誰がテロリストだッ！俺様たち、世界を守る勇者&女神だっつの！」

女神「だから、そのユニット名はいやあああああ！！！」

警官「しかも何だ、このじいさんと女性のコスプレのようなカッコわ！とりあえず全員、署まで来てもらおうっ！（3人全員に手錠をかける）」

ミイラじじい「(T皿T) にゅおおおおっ。く……くつじょく
〜!!!」

女神「(Ω∩Ω) 聞いてください、お巡りさんんん！本当に違
うんですったらあああああ。」

警官「はいはい判った判った。ヨッパライはみんなそう言うんだよ
ネ！話なら署で聞くからっ。」

店員「あ、先にお会計お願いします。全部で29800円になり
ます。」

勇者「d(ゝω・*)b あ・お金はそのミイラじじいが払うか
ら、よろぴくネっ★」

ミイラじじい「(C) ~ (C)。∩。(C) ギニアアアア!!!!踏
んだり蹴ったり————!!! (悶絶叫)」

真面目に世界の命運を賭けた戦いが始まるかと思いきや、アッサリ
と警察にしょっぴかれてしまった3人なのであった!!
よい子のみんなは、居酒屋で悪臭漂う刃物を振り回して暴れてはい
けませんヨ★

次回、新たな展開の予感!!

その前に、勇者&女神は警察から出てこられるのかっ？

続く。

16話 「最大最強の敵、現る!!!!」

世界の命運を賭け、居酒屋つば九で悪魔伯爵ミイラじじいと戦おうとした勇者ミナミンと女神アルテシアだったのだが、店員に警察に通報されてしまい、酔っ払って暴れたバカとして全員逮捕されてしまった！

——警察の留置場に、まとめて放り込まれてしまった3人だったのだが…。

勇者「ンガゝスピヨピヨピヨ……」

女神「ミナミン！ちよつとミナミンつてば！もう朝ですよ！起きてください！」

勇者「ぐへへへへ。もう食べられなあい。シノちゃんも、藍子ちゃんも、リンゴちゃんも、みいんな俺のものだア。」

女神「へ、×、；」　またド淫夢ですかっ！第一話と全く同じ展開じゃないですか！！ええい、もう起きなさいというに！！」

(ノ*、A') ノ ⊥ ∴ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙ ∙
 どんがらがっしゅん!!!!!!

留置場のベッドから転げ落ちた勇者「ムガ？ あれ、アルじゃねえか。」

てか、ココどこ？何で俺様たち、牢屋に入ってるのっ？（キヨロキヨロ）」

女神「ここは警察の留置場ですよ！昨日、私たち、警察に捕まってしまったでしょ！」

勇者「Σ（「Δ」；） えええええっ？何でっ？」

女神「（「Δ」；） 昨日の出来事を、全く覚えてないんですかっ！？」

勇者「えーと、たしかミイラじじいとビール飲んで〜焼酎飲んで〜日本酒飲んで〜ウイスキー飲んで〜。おっ、思い出した思い出したっ！俺様、その後、ムカついたからミイラじじいを倒そうとしたんだけど、警察に邪魔されたんだった！」

女神「「、、、（T∇T）」、、、 世界を救うためではなく、ムカついたからミイラじじいさんを倒すつもりだったんですね。いや、判ってはいましたが…。」

勇者「あれ？そーいえば、ミイラじじいがないぞ！奴はどうした？おのれ、一人だけ脱出しやがったのかっ？（嫉妬）」

女神「ミイラじじいさんは、夜中にゲロゲロ吐きだして、救急車で病院の方へ搬送されてしまいましたよ。みんな大騒ぎになってたのに、ミナミンったら、ぐっすり眠りこんで全然起きないんですもの。」

勇者「あの程度の酒で簡単に急性アルコール中毒ってかよ！つゝかさゝ、先代魔王は糖尿病らしいし、現魔王のピイチャンだってニ―

トでぐうたらだつゝ話だし、もしかして悪魔連中って普通に弱くね？この俺様が、わざわざ討伐に出かけなくても、近所の血の気の余ってそくなヤンキー少年を10人ぐらい集めて攻め込めば、魔界制圧できそうな気がしてたまらないんだが。」

女神「い、い、い、(TVT)い、い、い、近所のヤンキー少年軍団に救われるような世界っていったい……!!」

勇者「なにおう！ヤンキー少年10人を侮ってはいかん!!奴らは若い分だけ命知らずなのだ！装備も充実している！武器…角材・野球のボール・釘バット等、防具…お父さん(建築作業員)のヘルメット・じいちゃん(農家)の農作業用ゴム長靴・盾は台所からチョッぱねてきた鍋のフタ!!これが10人もいるんだぞ!!おまけに全員、目つきが悪くマユゲもないのだ!!うをゝ何て強そうな集団なんだろうっ!!!!これで世界は安泰だああ!!(両手の拳を、天に突き上げて叫ぶ。)」

女神「……もう、あなたの妄想暴走には、どこからつつこめばいいのか判りません……。酒は抜けてるはずなのに、よくそんなこと思いつけますね…。(滝涙)」

勇者「おっ。ついでに今気付いたんだが、俺様のヌカミソードがないではないか!」

女神「ついであって!一番大事なことでしょっ!聖剣エ・ク・ス・カ・リ・バァァァァ(名前を強調)は、刃物厳禁ということで、警察に没収されてしまいましたよ。はううう。事情を説明して、返していただかなくてはい。」

勇者「何より、ここからまず出ないことには、魔王討伐も何もあつ

たもんじゃねくな。さうて、どうしたもんだか……」

その時である！

鉄格子前の廊下奥側から、ズシーン……ズシーン……という、重低音が響いてきた。

その音は、だんだんこちらに近づいてくるようだが……？

勇者「i l — l i (Φ Δ Φ ;) i l — l i こ……この音わ、もしやッ？」

女神「何かしら？ 誰かの足音のようですが……」

勇者「(… ; ; Δ ; ……) し……しまったあアアア！
！ 奴がっ！！ 奴が来てしまったあああっ！！ (青ざめながら、超ガクブル)」

女神「え？ 誰？ お知り合いの方ですか？」

勇者「奴は俺様の、最大最強の敵だっ！！」

女神「ええっ？ 最大最強の敵っ？」

勇者「C (< ; Δ 。) 、 うぎゃああああ！！ 牢屋内にいたのでは逃げ切れん——！！ タースケテエエエ！！」

あの凶太い神経の勇者ミナミンをここまで怯えさせる、最強最大の

敵とは一体誰なのかっ？

ミイラじじいの病状はっ？

聖剣エクスカリバーの行方はっ？

勇者&女神は留置場から出られるのかっ？

様々な謎を残しつつ、物語は新たな局面へ突入するッ！！

続く。

17話「勇者、戦闘不能!!」

留置場の鉄格子の中にて、朝の平和(?)なひとときを味わっていた勇者&女神だったのだが、それを打ち崩すかのように、廊下の奥からこちらへと近づいてくる怪音!!

ズシーン……ズシーン……

勇者「ΣΣ『(一一一、□、一一一;;)』 ギャアアア!!!!
間違いいええええ!!!! 奴の足音じゃああああ!!!! 奴が!! 奴が近づいてくるううう!!!! 俺様、殺されるううう!!!! (往生際悪く留置場の天窓にモガモガとよじ登って、逃げようと試みては、失敗してずり落ちる。)」

女神「Σ(´・ω・111) ええっ? 何をそんなに怯えているんですか、ミナミン!」

ズシーン……ズシーン……

……ズ・シーン。

鈍く響き渡っていた足音は、勇者&女神の牢屋のちょうどまん前で止まる。

果たして!!

鉄格子の向こうには、まるで山のフドウのようなエプロン姿の巨漢

が、額に青筋を10個ぐらい浮かべて、すごい形相でミナミンを見下ろしていた！……！

勇者「Σ（ロ、111）　ぎいやあああああ！！！！か……母ちゃんんんんんん！！……！！」

母親「ミナミンンンツツ！！！！あんた、何やってんだいいい！！！！酒飲んで、居酒屋で暴れて警察にしょっぴかれるとは何ごとじゃあああああッ！！！！」（怒号が、警察署の建物全体を震度7級で揺らす。）」

女神「Σ（――。Δ）。　えええええっ？ミナミンの恐れていた最強の敵って、ミナミンのお母様っ？」

母親「身元引受人になってくれって、朝、警察からうちに電話が来た時、あたしゃ恥ずかしくて口から火を吹くところだったよ！」

勇者「恥ずかしくて顔から火が噴き出そうだったってんなら判るけど、口から火を吹くのは変だろっ！！キングギドラかよ！！！」

母親「人の言葉尻つかまえて、ツツコミ入れられる立場だと思ってるのかいいい！！！！」（怒りのあまり両目がギラツチヨリン★と光りだし、地獄の閻魔の如く、口から炎がベロベロと吹き出してくる。）」

勇者「比喻じゃなくて、本当に火を吹いてやがるよ！！キングギドラそのものだよ！！それでも人間か！！！！」（涙目になりながら、母親がヒト科のホモサピエンスであることに対して猛抗議。）」

母親「問・答・無・用——！！！！そこになおれええい、ミナミン——！！！！！！」

ミナミンの母ちゃんは、ポパイのような豪腕を鉄格子にかけると、フンヌツという掛け声とともに、左右に引く。

鋼鉄で出来ていたはずの棒は、まるで飴細工のようにぐんにやりと、いともあっさりひん曲がってしまう！

ミナミンの母ちゃん、恐るべし！！！！！！

母親「くらえ！！息子矯正拳！（要するに息子におしおきするためだけに、自力で適当に拳法を開発。）超必殺奥義！！！！絶・天狼無双飛翔薔薇醬油転生憂鬱昇龍覇アアアアア——！！！！」

やたら画数が多くて読む気の失せるような漢字ばかりの必殺技名を叫ぶと、母ちゃんは拳をくりだした！！

衝撃波が留置場のコンクリートの床を爆音と共に破壊しながら突き進み、ミナミンを直撃！！

ミナミンは見事に壁にめりこみ、一撃でHPが0となって戦闘不能と化した！！！！

女神アルテシアは、掃除機が怖くて部屋の隅っこまで追い詰められてしまった子猫ちゃんのようにプルプルと震え、硬直したままだ。

そこに、激しい轟音に驚いた警察官が、様子を見にすっ飛んできた。

警官「ちょっと！どうしたんですか……ううっ？何だ、この手榴弾が10発ぐらい炸裂したような有様わっ？もしかしてテロッ？」

母親「ああ、おまわりさん。すみません、うちの息子をご迷惑をおかけいたしました……。 (深々と頭を下げる)」

警官「いや……あの……息子さんはたいした迷惑ではないんですが、それよりも、この留置場の有様は一体……。」

母親「ああ、これですか？タオヤメ（漢字では『手弱女』と書く。）の私がちよっぴり★手をかけただけで、こんなふうになってしまったんです。建物や鉄格子が、老朽化していたんじゃないでしょうか？（いけしゃあしゃあ）」

警官「あ………そうなんですか………。お………教えてくださって、感謝いたします……す……。 (怖いので反論できない)」

母親「いえいえ、警察に協力するのは、善良なる市民の努めですから。それでは、これにて失礼いたします。息子を連れて帰りますので、息子が持っていたはずの剣も返してください。」

警官「いえ………あれは凶器にあたりますから、お返しするわけには………」

母親「返していただけるんでっ・すっ・よっ・ねっ？ (母ちゃんの背後のオーラがゴゴゴゴ……という音と共に、仁王の姿をかたどってゆく。)」

警官「あ………ハイ………勿論ですとも。おっ、お返しいたしますですッ……… (敬礼)」

母親「さーて。話も済んだところで、ホラ、さっさと帰るよ！ミナミン！ー！（壁に埋まったままのミナミンをえぐりだし、首ねっこを持ってひきずってゆく。）ほら、お隣のおじょうちゃんも、一緒においで。」

女神「（…；；；…） ははははははいいいいいい。（従属）」

こうしてミナミンの母ちゃんの功績（？）により、無事…いや…全然無事じゃないか…：…どうにかこうにか牢屋を脱出した、勇者ミナミンと女神アルテシア。

母ちゃんが無理強いした警察のご好意により、聖剣エクスカリバーも返却してもらえて、一件落着★

留置場を脱出した後、新たな二人の旅は始まる…：…のか？

そもそもミナミンは生きているのか？

ある意味、魔王にやられるとかよりも、勇者&女神は大ピンチのようない気がするぞ！！

続く。

18話「まんじゅう怖い。母ちゃんももっと怖い。」

ミナミンの母ちゃん（似てる有名人…山のフドウ★）の脅迫……じやなかった、協力により、無事留置場を脱出し、聖剣ヌカミソード……じゃなかった、エクスカリバーも取り戻せた、勇者ミナミンと女神アルテシア。

彼らの次なる旅の目的地はどこだっ？

それはさておき、勇者ミナミンは母ちゃんの息子矯正必殺拳の超大技をくらい、気絶中である。

母ちゃんは軽々とミナミンを肩にかつぎ、悠然と街をゆくのだった。その後ろを、チョコチョコと小走りで、女神アルテシアが続く。

母親「いやゝ、今日もいい天気だねえ。街のみんなも親切に、か弱い私が息子をかついでのに気をつかって、道をあけてくれるよ。」

女神「いゝゝゝ、（T▽T）いゝゝゝ、はうううゝ。て、いうか、なんとなくみんな怖がって目を逸らして避けているようなく。モーゼになった気分ですうゝ。」

母親「ところで、アルテシアちゃんだっけ？うちのバカ息子がすっかりお世話になっちゃったみたいだねえ。」

女神「いえいえ、とんでもありません！ミナミンには、こちらこそお世話になっております。魔王を倒し、世界を平和に導くために、協力してもらっておりますので。」

母親「へえ、この子がそんな立派なことを！ミナミンは一体、あんなに何の協力をしたんだい？」

女神「ええと……とりあえず初日の昨日は、ミナミンが失くした聖剣エクスカリバーと一緒に探して、それから見つけたエクスカリバーはすでにヌカミソ漬けになってたので一緒に洗って、魔界の四大公爵であるミイラじいさんと三人で飲み会をやって、で、最後には乱闘騒ぎとなりまして、全員仲良く警察にしょっぱかれました……。」

母親「（溜息）協力はしているけど、役にはたってないみたいだね……。」

女神「はい……。今、昨日の出来事を口に出してみても、お母様とまったく同じツツコミで、最後を締めようとしていました……。ううう。（涙目でうなだれ）」

母親「（；、㐁）すまないねえ。ホント、うちの息子ときたら、出来が悪くって。ヘタレなところなんか、父ちゃんにそっくりでさあ。」

女神「そういえば、ミナミンのお父様はどうなさっているのですか？」

母親「ああ、今、まんじゅう屋の店番やってるよ。」

女神「あら、ミナミンのご実家はまんじゅう屋さんなんですネ。」

母親「勇者の家系がまんじゅう屋っていうのも変な話なんだけどさ。でも勇者だけでは普通に食べていけないからね。」

女神「(＊'ω＊) いいえ、立派なお仕事だと思います！私、おまんじゅう大好きです！」

母親「そうかいそうかい。(上機嫌) あんた、いい娘だねえ。今度、うちに来た時にたらふく食べさせてあげるよ。」

女神「。。+..ゝ(＊'▽') シ..+。 ほんとですかっ？」

母親「一番人気は、『勇者まんじゅう』さ！伝説の勇者の血筋をひいた父ちゃんが作る、勇者まんじゅうっていう触れ込みなんだ。」

女神「(＊'ω＊) まあ、抜け目なく、勇者家系であることをおいに利用されているんですね。お見事ですわ。」

母親「本当はまんじゅう焼いてるのが私で、店番はうちの人なんだけどね。ほんと、うちの人ときたらミナミンと一緒にヘタレなもんだから、満足にまんじゅうひとつ焼けやしない！ところで見たところ、さっき魔界の誰かと、三人で飲んだって言ってなかったかい？警察にはあんたたち2人しかいなかったみたいだけど？」

女神「あ、ミイラじじいさんは留置場に入った後、急性アルコール中毒になって救急車で病院へ運ばれてしまったのです。」

母親「Σ(；・、∩・) 何だってッ？そいつはいけない！お見舞いに行って、母親としてうちの息子の非礼を詫びないと！」

女神「Σ(・□・;) はっ。そうですよねっ。私もミイラじじいさんに、謝りたいですっ！」

母親「多分、警察署から一番近い総合病院に運ばれたのだろうから、そこに行ってみようか。けど、手ぶらってのも何だね。うちのまんじゅうでも持っていてあげようか。」

女神「それは素晴らしい考えです！勇者まんじゅうなんて、きっと魔界では手に入らないだろうから、ミイラじじいさんもきっと喜んでくださいますわ！」

思わずぼそりと呟く勇者「……………何で魔界の四大伯爵に見舞いに行った挙句、よりにもよって『勇者まんじゅう』持ってくんだよ、お前らオカシイっつの……………つか意気投合してんじゃねえよ……………」

母親「…………ん？アルテシアちゃん、今、何か言ったかい？」

女神「いいえ、私は何も。（ふるふると首を横に振る）」

母親「おかしいねえ。確かに何か、聞こえた気がしたんだけど。」

女神「ミナミンも相変わらず、ぐったり気絶したまんまですしねえ。」

母親「お、公園があるね。ミナミンを担いだままじゃ重たいから、私だけ、ひとつ走り店に戻って、まんじゅうを取ってくるよ。アルテシアちゃん、ミナミンとエクスカリバーを公園においてゆくから、ちょっと見ててもらえるかい？」

女神「（＊＾▽＾）／ はいっ。わかりましたあ。」

母親「アルテシアちゃんの分の、まんじゅうも持ってきてあげるか

らね!」

女神「、(＜▽＞)ノ わぁ、ホントですかっ? わざわざ有難うございますっ!」

母ちゃんは、肩に担いでいたミナミンを公園のベンチの上に降ろすと、凄い振動と爆煙をあげながら、自宅に向かって走り出したのであった。

その後ろ姿は、まるで怒りに我を忘れて突撃する、王蟲のようであったという……。

勇者「(突然ガバツと起き上がる) ヨッシャアアアア! 今だ——!! 逃げるぞ、アル——!!!! (叫ぶや否や、又カミソードをひっ掴み、脱兎の如く走り出す)」

女神「Σ(「ロ」111) えええええッ? 起きてたんですか、ミナミン——?! 逃げるってどこへ? っていうか、私のおまんじゅうはああああ??」

母ちゃんの間をついて、脱出に成功した勇者ミナミン! だがしかし、一体どこへ逃げるつもりなのであるうかつ? 母の魔の手は、世界の裏側まで追いかけてくるに違いない!! どうする、ミナミン! 逃げ切れるのか、ミナミン! そして女神アルテシアは『勇者まんじゅう』を食べられるのか?

続く。

19話「勇者、ついにヤル気を出すハメになる！」

家へまんじゅうを取りに行った母ちゃんの間について、母ちゃんの魔の手から逃げ出した勇者ミナミン！

ミナミンを追う、女神アルテシア。

二人はこの後、一体どうするつもりなのか？

勇者「ハアハアハア……ここまで逃げて来れば、母ちゃんも追ってこないだろう！」

女神「待ってくださいーミナミンー！はあはあ……やっと追いついたわ。まったくもう、ミナミンったら！急に走り出すんですもの！私、お母さん手作りのおまんじゅうを食べ損ねてしまったじゃないですか。（ぶんぶん）」

勇者「まんじゅうぐらい、俺様がそこらへんのコンビニで買ってやるわい！……うゝむ。母ちゃんのアマリの怖ろしさに、夢中で逃げてきてしまったが、ところでココはどこなのだ？（キョロキョロ）」

女神「さきほどいた場所とは別の公園のようですねえ。」

勇者「ここは、でかい建物に隣接しているみたいだな。周囲を白い塀で囲まれているし、もしかしたら、ここは公園ではなく、あの建物の庭なのかも知れん。」

女神「他にも人はいらっしゃるようですし、出入りは自由みたいです。芝生も手入れされているし、色々なお花も咲いているし、綺

麗なところです。あの建物は何かの公共施設なのでしょうか？」

勇者「あまり来たことのない場所だからな。俺様もここいらへんの地理には詳しくないのでよくわからん。建物の正面入り口に回れば看板ぐらいあるだろう。後で行ってみよう。」

女神「あ、あそこにベンチがあるわ。一休みしましょうよ、ミナミン。」

ミナミンとアルテシアは、公園の真ん中にある、白いベンチに腰掛けた。

ふうやれやれと、一息つく二人。

女神「ところで、これから先、どうするのですか？ミナミン。ミイラじいさんのところにも、お見舞いに行かなくちゃならないし。」

勇者「敵のお見舞いは行かんくていいのっ！ うゝむ。これからどうするか、か。何か、しばらく実家には帰れない雰囲気だしな。」
(腕組みして、しばらく考え込む)

女神「考えるまでもないことです！あなたは勇者なんですから、魔王ピイチャンを聖剣エクスカリバーで倒して、世界を平和に導けばよいだけのこと。」

勇者「そうだな。魔王を倒しに行くとするか。」

女神「(、×´;)」 まったくもう！ミナミンったら、どうしてそんなにヤル気がないんですか。そんなだから貴方は、いつまでたっ

ても……………え？今、魔王を倒しに行くって言いました？」

勇者「おう。俺様、これから魔王を倒しに行くぜ。」

女神「Σ（「ロ、１１」） どうしてっ？何かあったんですか、ミナミン！……はっ！もしや先ほどお母様にくらった拳の衝撃で、頭をぶつけてしまったのでわ……！きゅ……救急車を呼ばないっ！
！熱測りましょう、熱！（ミナミンのおでこに手のひらを当てる）」

勇者「（「π、？」） あのなあ。熱なんかないっつの。俺様、至ってマトモじゃない。魔王を倒せて言ったのはお前だろうが。」

女神「……いや、まあ、そうなんですけども。でも、ミナミン、どうしてそんな、いきなり勇者らしさに目覚めちゃったんですか？（うたぐり深い目）」

勇者「目覚めたわけじゃねえよ。魔王を倒さないことには、このままだと俺様、家にも帰れねえだろうが。つーか、ミイラじいいの話から推測するに、魔王پیチャンって、すんげえ弱そうじゃね？だったら、俺様的にはサクッと魔王を倒して、とっとと最終回を迎えたいわけよ。」

女神「ははあ……なるほど。」

勇者「ところでさ。……アル。」

女神「はい。何でしょう？」

勇者「さっきから気になってたんだが、俺様たちの真正面にいる男、

見えるか？（指をさす）安っぽい黒のジャージ上下を着て、髪がぼさぼさで、頭に角、ケツにしっぽの生えてる、いかにもヲタクっぽい、モテなさそうな奴がいるだろ。」

女神「ああ、あの白い壁際にいる方ですか？見えますよ。私、視力はとても良いのです。あの方、壁にでかかど、スプレーで何か書いていらっしやるみたいです。何て書いてるのかしら？ええと……『夜露死苦 メカドック』ですって。」

勇者「……アル。」

女神「はい。何でしょう？」

勇者「俺様、その、『夜露死苦 メカドック』っていう単語に、著し……聞き覚えがあるんだが、何話目に出てきたか覚えてるか？」

女神「ええと……確か、『11話 ぐうたら魔王』の回ですね。」

【抜 粋】

＞勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

＞女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。」

＞勇者「今更、誰も知らんぞ、『よろしくメカドック』なんて古い番組……！」

……この部分じゃないでしょうか？」

勇者「……アル。」

女神「はい。何でしょう？」

続く。

20話「爆走!!!疾走!!!!三つ巴かけっこ大会!!!!」

※今回、実況アナウンスは全て、千葉繁さん（無駄に血管の切れそうな、裏声ハイテンション全開モード）の声でお読みいただければ幸いです★

チャララチャラチャラ♪（雲に乗って、銀河を駆け巡る、竜虎の画像が一瞬流れる）

つ……ついにイイイイ!!!!!!

平和な公園の白い壁に、『夜露死苦メカドック』というハレンチ（?）な落書きをしている、魔王ピイチャンを発見した、勇者ミナミンんんんん!!!!!!（ドッギヤアアア!!!!!!）

勇者は聖剣ヌカミソードを透明なビニール袋から解き放ち、魔王を追いかけるウウウウ!!!!!!（ズッキュウウウン!!!!!!）

北斗の宿命（何それ）は、あ・誰にイイイイ微笑むのかアアアア!!!!!!（ズガシヤアアア!!!!!!）

戦いの火蓋は、今!!!!!!斬って落とされたアアアア!!!!!!（ドンガラガッシヤアアア!!!!!!）

勇者「εε|||||≡ゝ、（#、∇）っ「」」 待アアアア
ちやあああがれエエエい!!!!魔王ピイチャンめええええええ!!!!!!
（悪鬼の形相で、追いかける）「

魔王「||ε||ε||「（≧∇≧）」 ギヤアアアア!!!!刃物持った変態が追いかけてくるっスううう!!!!タ〜スケテえええええ!!!!!!
（命がけで逃げる被害者）「

勇者「Ⅲ（。Ⅲ。Ⅲ） テメエコラ、正義の剣を振りかざす勇者様を、刃物キ○ガイ変態扱いするとは何事じゃああああ！！！！」

ちよつと離れた所で、ぼんやりと二人を傍観している女神「ミナミンが、正義の剣を振りかざす勇者様か、刃物キ○ガイ変態かって聞かれたら、絶対後者の表現の方が適切だと思うけどなあ…。」

白い壁に取り囲まれた公園内を、ぐるぐるすると駆け回る勇者ミナミンと魔王ピイチャンんんん！！！！

んだどもストコドツコイ、両者とも運動不足丸出しの鈍足だったため、うっかり均衡がとれていて、その距離は縮まりもしなければ広がりもしないイイイッ！！！！

平和な追いかけっこは、何の進展もないまま、5分が経過したアアア！！！！

そして、根性のねー二人の息がそろそろあがり始める頃オオオ！！！！

公園内に突如、異変が起こったのであるウウウ！！！！

母親「くおらアアアアア——！！！！！！ミいいいナああああミいいいンんんんん！！！！！！（ばしゅるるる……フゴウウウウ……↑闘気の入り混じった、濃い鼻息音。）」

勇者「Σ（ロ、——） ギャアアアアア！！！！か……母ちゃんんんんん？？？見つかったアアアアア！！！！！！」

ミナミンが大気を震撼させるような怒号の先に目を向けるとおおお

おお！！！！

現れたのは、新手のスタンド使い……じゃなくて、山のフドウチツクな母ちゃんだったアアア……！！！！

鬼神の如き形相を浮かべ、ドドメ色の魔闘気を、毛穴という毛穴から噴き上げながら、公園の入り口に立っているウウウウ！！！！

背景には、『ゴゴゴゴゴ……』とかいう、太筆でヤケクソ書きしたような文字が浮かんでいたアアアア！！！！

母ちゃんの鼻息だけで、公園の花壇の花や樹木が全て、なぎ倒されてゆくウウウウ！！！！

そして、風の谷を襲う王蟲の群の如く、轟音と爆煙と共に、母ちゃんがミナミンに向かって突撃してきたアアアア！！！！

勇者「（＊、ω、＊）……ウフフ。ホラ、怖くない……。……って

！！いやいや、すっかりしろ、俺様！！冷静にナウシカごっこ（自己暗示気味）してる場合じゃないから！！だいたいそれ、テトを手なづける場面だから！！あまりの恐怖に思考停止して、自分でボケて、自分でツツコミ入れて、しかも滑っちまったよ！！ぐぎゃああああ！！！！積み荷を燃やしてええええ！！もとい、母ちゃんを燃やしてええええ！！！！殿下！！（誰？）巨神兵を！！巨神兵を呼んでくださいませええええ！！！！（心のLRボタンを同時に押し。みなみんは にげだした）」

魔王「Σ（ロ、１ー１）ギャアアアア！！！！なんかいきなり、

勇者がスピードアップしてきたっスウウウウ！！！！」

勇者「待て魔王ピイチャン……！！！！それから助けて、殿下アアア……！！！！（だから殿下って誰）」

母親「オラオラオラオラアアア！！！！無駄無駄無駄無駄アアアア

ア！！！（BGM…王蟲が爆走してくる時の音楽）」

公園を輪になってぐるぐると走り回る3人を、中心位置で温かく見守る女神（かけっこ不参加）「まあ、お母様ったら、まんじゅうの箱を2つ持っていらっしゃるわ。ひとつはお見舞い用で、もうひとつはきつと私の分ですね。嬉しく♪あら、そこに自動販売機があるわ。ちようど良かった。お茶買ってこよっと！」

——突然だがっ！！！！

人間が普段使用している能力は、全体の30%だというツツ！！！！あまりもの恐怖に、勇者身ナミの眠っていた70%の力やら、いきなり目覚めたアアアア！！

ピッカ———*…☆…+…（∩*。▽。）∪…☆+…
°…*
°…*

勇者「*…☆…+…、（。∩。）ノ…☆+…*
卍・解ツツ！！！！（↑？） 解き放て、俺様の燃える小宇宙！！
！！俺様ターボ・オン！！！！（ピッカアア★）どおおおおり
やああああッツツ———！！！！」

魔王「Σ（ロ、lll） うわあああっ！！！！勇者がまたスピードアップしっすううう！！！！……ぜえぜえ……も……もうダメっス、追いつかれるっすううう———！！！！……
……って、あり？」

スピードアップしたミナミンは、なんと、ついに魔王を追い越した

のであるウウウ！！！
やったぞミナミン、凄いぞミナミン、それでこそ勇者だミナミン
んん！！！

勇者「、（。D。）ノ ヨッシャアア！！やったぜ俺様！！魔王に
勝ったぞ！！（かけっこで）……って、ダメじゃん！！意味ねーよ
！！何やってんの、俺様！！ぎよもおおお！！公園内をぐるぐ
る走り回ってたもんだから、このままでは母ちゃんにも、追いつい
てしまいそうだアアア！！！！」

全然空気読んでない女神「♪（＊＾▽＾）ノゝ みなさあん！全
員分のお茶を買ってきましたよ！おまんじゅうもあることですし、
ミナミンも、お母様も、魔王さんもそろそろ一休みしませうん？」

母親「（急ブレーキ）（＝＾▽＾＝） あら、アルテシアちゃん、
気がきくことゝ！ちようど喉が渴いてきてたんだよ。」

魔王「（停止）。＋。（・▽・）。＋。 え？俺の分もあるんっ
スか？あざーす！いただくっスゝ！」

勇者「凹○パタッ………………。 （展開の早さと適当さについてい
けず、おまけに筋肉痛と疲労で、ばったりと倒れこんだまま動けな
い）」

女神アルテシアの天然の陰謀（笑）により、結局、仲良く全員でお
茶することになった、御一行！！！！

世界の運命はどうなってしまふのかっ？
勇者の筋肉痛は大丈夫なのかッ？

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456y/>

ふあいなるクエスト！

2011年11月29日16時50分発行